
魔法少女リリカルなのは ~ Angel Heats ~

神の味噌汁世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜Angel Heats〜

【Nコード】

N8789S

【作者名】

神の味噌汁世界

【あらすじ】

無愛想な青年セシル・ミューアーと時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンの二人が織り成す愛と希望とちよっぴり涙が入った物語

注意：この話には、オリ主、主人公最強、ご都合主義、さらには作者の駄文などの成分が含まれています。

プロローグ（前書き）

初作品ですので、なにかとミスなどがあると思われませんが、色々と感想を言ってもらえるとありがたいです。

プロローグ

?????side

この星は年中砂嵐が吹き荒れ人はおろか動植物さえ活動はしていない。そんな吹き荒れる砂嵐の中、一つの影が歩いていった。背丈からして五歳くらいだろう、金色の眼に漆黒の黒髪、まだ、あどけなさのある少年だった。

「うう、痛いよ、辛いよ、苦しいよ・・・」

少年は一人呟く。

「誰か・・・助けてよ・・・」

少年は虚しくも残酷な世界に絶望する。

しかし不意に光が空から現れる。

それと同時に砂嵐も止み、少年は虚ろな眼で光の方を見上げる。

少年の瞳に映ったものは・・・

純白の光を放ち、背中には三対六枚の翼を持った天使だった・・・

プロローグ（後書き）

とりあえず、プロローグはこんな感じで。
次話もすぐにかいていきます。

第1話

????side

「ここが機動六課か・・・」

と機動六課の前でそう呟くのは、黒髪の長髪で金眼の青年 セシル・ミューアー だった。

「（んみゆ？・・・セシル、六課に着いたの？）」

すると間の抜けた女性の声が念話で青年に尋ねる。

「（ああ、これから部隊長に挨拶に行くところだ）」

「（ねえ、セシル？私も出ていい？）」

女性が子供っぽい口調で聞いてくる。

「（駄目だ。）」

が、俺はバツサリ切った。

「とりあえず部隊長に挨拶だな。」

それから何やら叫んでいるが無視して俺は入っていった。

「本日より、機動六課に出向になったセシル・ミューアー執務官だ。」

「高町なのは一等空尉です。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

「うちは八神はやて二等陸尉や、ここの部隊長をやっとる。よろしゅうな」

「こちらこそよろしく頼む。」

フェイトside

やっぱり、最初は少し固くなっちゃうかな？

黒い髪は腰あたりまで伸びていて後ろで一つにまとめている。顔は結構整っていてイケメンの部類に入るだろう・・・だが、とても無愛想で、拒絶するような態度、これがせつかくのイケメンを台無しにしている。

「それじゃあ、セシル君は、ライトニング隊の副隊長ということでしょうか。よろしく頼むわ。」

「分かった。」

「え?! ちょっと待ってはやて? 聞いてないんだけど?」

彼は素つ気なく返すが、私の隣でさらっと、とんでもない発言をするはやて。

「当たり前やん!」

はやてはすごくいい笑顔で親指を立てて言うてくる。

「黙っておいて聞いたときに驚くフェイトちゃんを見るためやもん!」

うん、怒るのを乗り越して呆れてきたね・・・

「はやてちゃん、フェイトちゃんに言うてなかったんだ・・・」
なのはもう少し呆れ顔で呟いてた。

「あ、これ部隊長権限やから、フェイトちゃん隊舎の案内と説明よろしくな?」

「・・・・・・はい。」

部隊長権限ってこんなことに使うものだったけ? と疑問に思いながらセシルを連れて部隊長室を出ていく私だった・・・

隊舎の説明も粗方終わり、ちょうどお昼の時間だったので私とセラ
スは食堂で食事をした後、珈琲をのんでいる。

「ふう、まさか部隊長が同じ年とわな・・・」

私の向かい側に座って珈琲のブラックを飲んでいる彼が呟いた。

「ビックリした？」

「ん？少しな・・・それにしても。」

「どうかした？」

「八神部隊長はいつもあんな感じか？」

「あははは・・・今日はまだマシな方だと思うよ？」

今日のはやての破天荒ぶりはまだましな方だと思う。酷いときはメ
イド服でコス（ry

「そっか・・・」

と彼は短く答えてまた珈琲を飲む。

「あ、あの子・・・」

私はなんとなく彼に気になったことを聞いてみた。

「セシルはなんで執務官になったの？」

「……………」

そしたら彼の眉がピクツと動いたあと、私を少し睨んだ。

「あ、ごめんね？話せないんだったらいいよ？」

「悪いな、あまりいいたくはない。」

「うん……わかった……。」

（どうしよう、すっごく気まずい雰囲気になっちゃったよ……）

「なあ、こんな時間だが、仕事はいいのか？」

気まずさを感じた彼に言われて時計を見ると、1時を少し過ぎていた。

「え？うそ！？急がないと！」

私は急いで食堂を出た。

セシル side

「え？うそ！？急がないと！」

と言ってハラオウンは出て行った。

「ふう……。」「

「（セ〜シル〜！暇！ものすっごい暇！）」

温くなった珈琲を飲んでいるとさっきの女性からまた念話 came。

「（知らん。）」

「（酷い！？）」

「（酷くない。まだお前が出てくる時じゃない、だからおとなしくしてろ。）」

「（それは、いつか私が出なければならぬ時が来るのですか？）」「
急に子供っぽい口調から真剣な口調に変わる。

「（必ずではないが、おそらく何らかの事件が起こるだろう。）」

「（何故でしょうか？）」

「（機動六課メンバーのデータ見る。部隊長がSS、隊長等がオーバース、副隊長等がニアSだ、リミッターをかけてはいるが、明らかに過剰戦力だ。おまけにバックに三提督までもがついている。これから何か起こるって言っているようなものだ。）」

「（たしかに、過剰と言えますね。）」

「（おそらく・・・）」

「（過剰ともとれるほど戦力を保持しなければならない理由がある・・・）」

あいつも同じ考えに至ったのか、俺の思っていたことを言っていた。

「（だろうな。）」

「（それで、私も出なければならぬ可能性があるか？）」

「（そうだ、だが、あくまでサポートだ。それに必要最低限の補助でいい。お前の存在を管理局に知られるわけにはいかないしな。）」

「（そうですね。ですが、私がさせませんが。）」

「（あまり無茶はするなよ。お前に何かあっても困る。）」

「（うん。りょくかい。）」

女性の口調がまた子供っぽいのに戻る。

「（はあ・・・まあいい。お前は部屋で待機している。帰りに何か買って帰る。なにか要望は？）」

「（はいはい、この間のシュークリームってやつがいい。）」

「（わかった。）」

「あ、セシル君」

食堂でシュークリームを買って自分の割り当てられた部屋に行こう
と思ったところで不意
に八神部隊長に呼び止められる。

「どうかしたか？」

「いや、明日訓練所のほうにきてくれるか？」

「?・・・ああ、わかった」

それだけ言っただけ彼女は自分の部屋へ向かって行った。

「・・・・・・・・寝るか。」

何かよからぬことを考えているような笑みだったので少し考えていたが、面倒だったので考えるのを放棄して俺も自分の部屋へ向かった。

第1話（後書き）

投稿遅れてすいません、おそらく投稿は不定期なと思いますので
あらかじめ謝っておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8789s/>

魔法少女リリカルなのは～Angel Heats～

2011年10月9日01時40分発行